忘れられない新発田の人
山川丙三郎

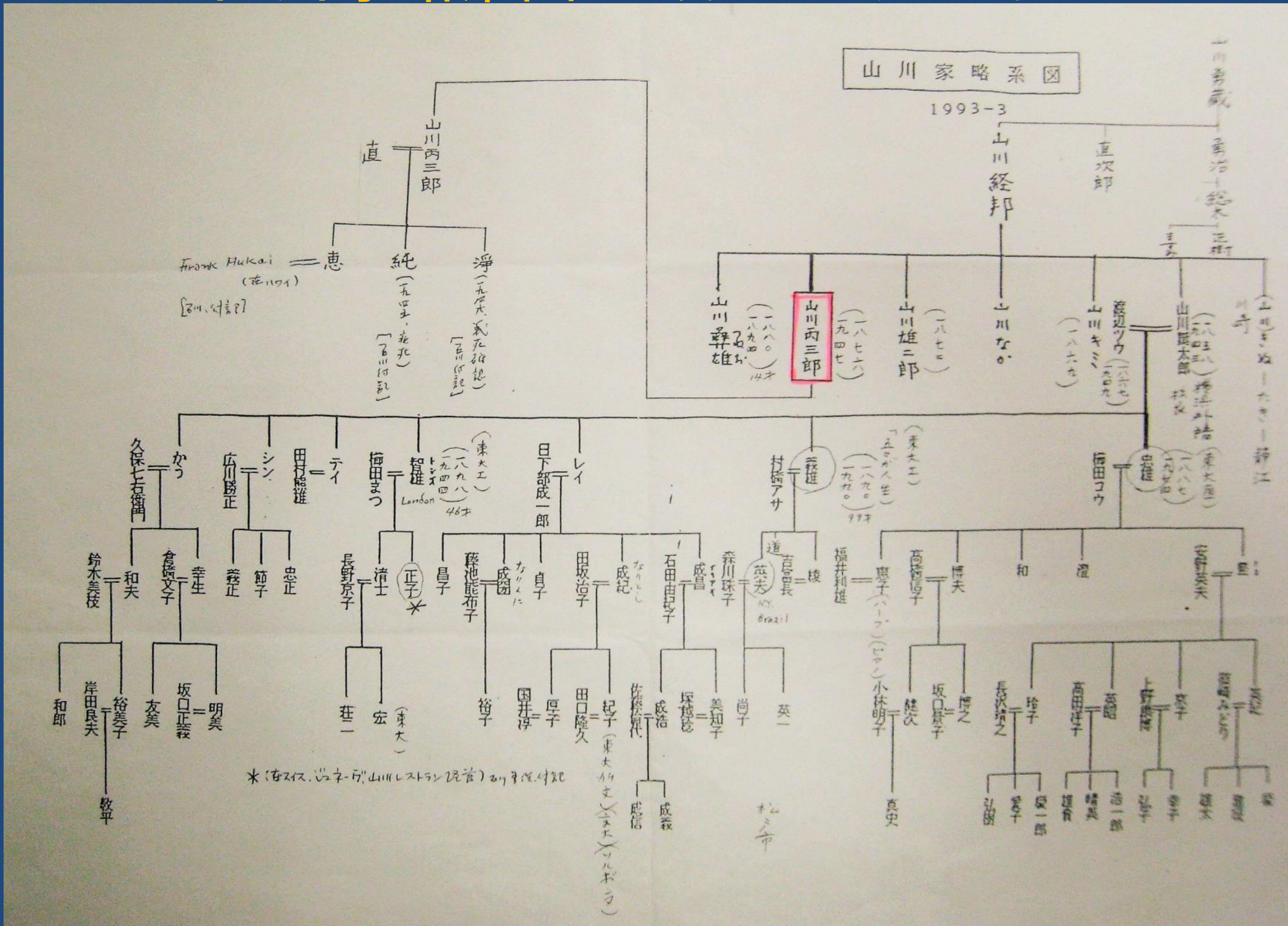
敬和学園大学
山田耕太

新発田出身のダンテ学者：山川丙三郎

1. 山川丙三郎の生涯

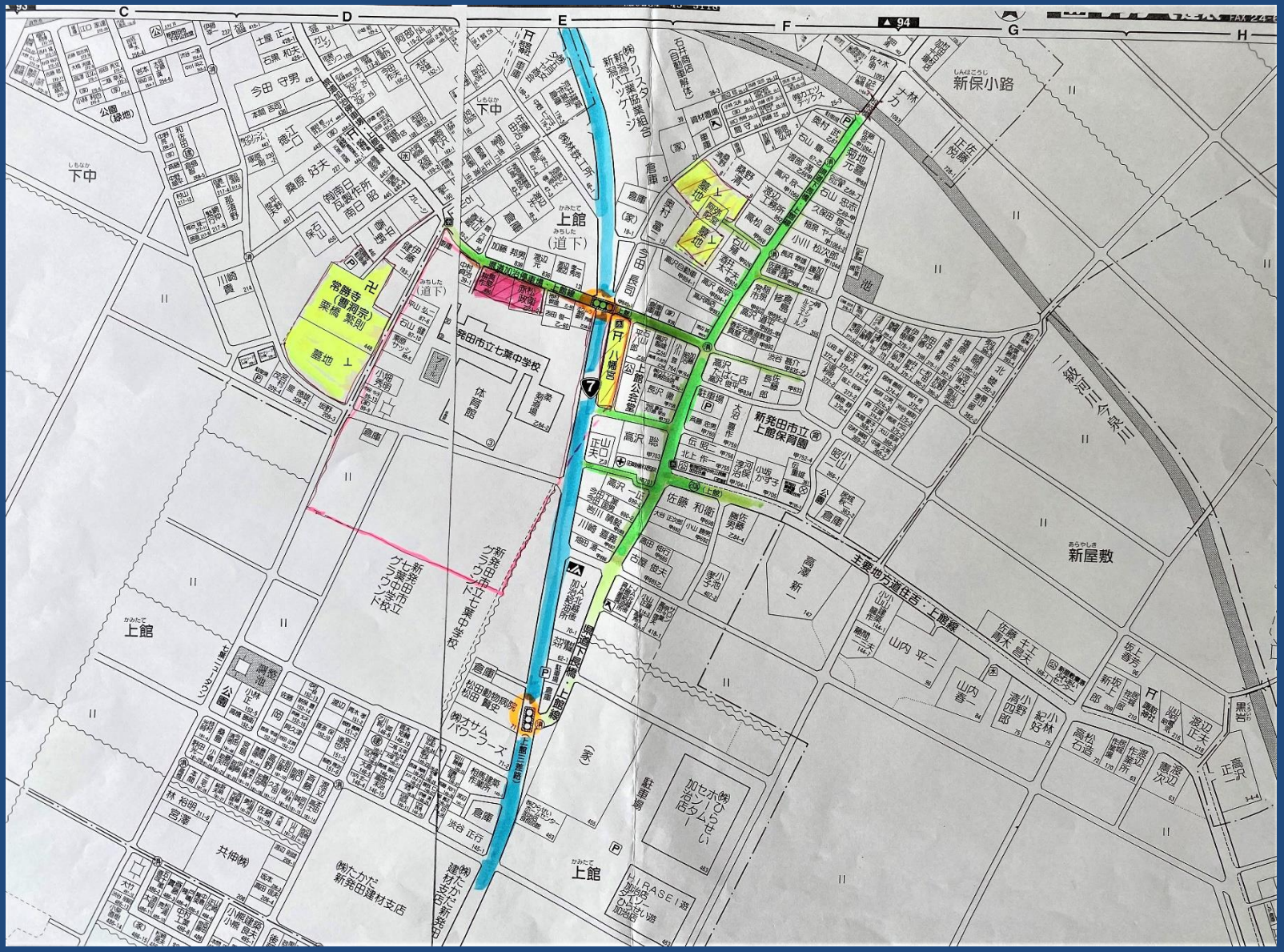
1876（M9）年　山川経邦・えきの三男、北蒲原郡上館村（現、新発田市）に生まれる
加治小学校（現、加治川小学校）、北越興商業学校を卒業
1889（M22）年　北越学館入学　五十公野の出村悌三郎（後東北学院院長）と出会う
1892（M25）年　受洗、東北学院本科１年編入　95年 本科卒業後文科専修科入学
1896（M29）年　島崎藤村東北学院教師着任 山川らと三人で松島巡り ダンテに関心
1897（M30）年　東北学院文科専修科（英文）卒業、東北学院図書館図書係
1898（M32）年　上京、憲兵練習所助教、99年 憲兵司令部付陸軍通訳
1904（M37）年　カリフォルニア大学バークレー校入学
1908（M41）年　アメリカ高等教育資格試験合格、太平洋神学校入学（1年半で退学）
1912（M45）年　帰国、新井奥邃・謙和舎の門下生（田中正造）『神曲』の翻訳に没頭
1914（T3）年　我が国で最初に『神曲・地獄篇』（警醒社）を出版　⇔　中山昌樹訳
1915（T4）年　北蒲原郡本田村本田の医師渡辺護・善の長女なおと結婚
1917（T6）年　『神曲・浄火篇』（警醒社）出版
1919（T8）年　出村悌三郎の斡旋で東北学院英文科教授に就任
1922（T11）年　『神曲・天堂篇』（警醒社）出版　1929（S4）『新生』（岩波書店）出版
1940（S15）年　東北学院定年退職・名誉教授　1947（S22）年　71歳で永眠
山川丙三郎の直弟子　林竹二（教育学者）・石川重俊（英文学者）他

山川家略系図（山川英夫氏作成、石川重俊先生より）

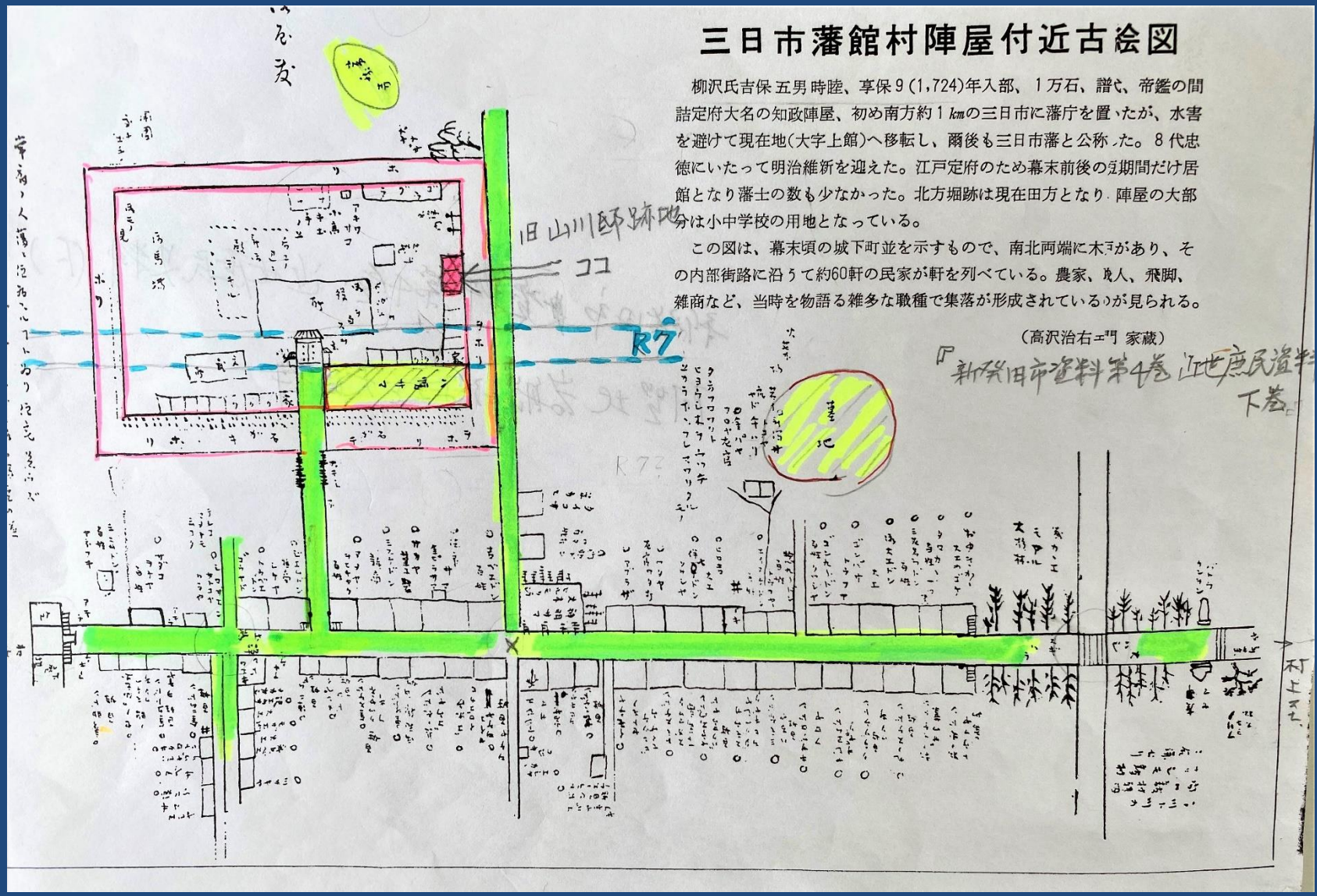


上舘(山川家)・五十公野(出村家)・本田(渡辺家)

山川邸所在地（新発田市上館）旧道・新道・寺院・館



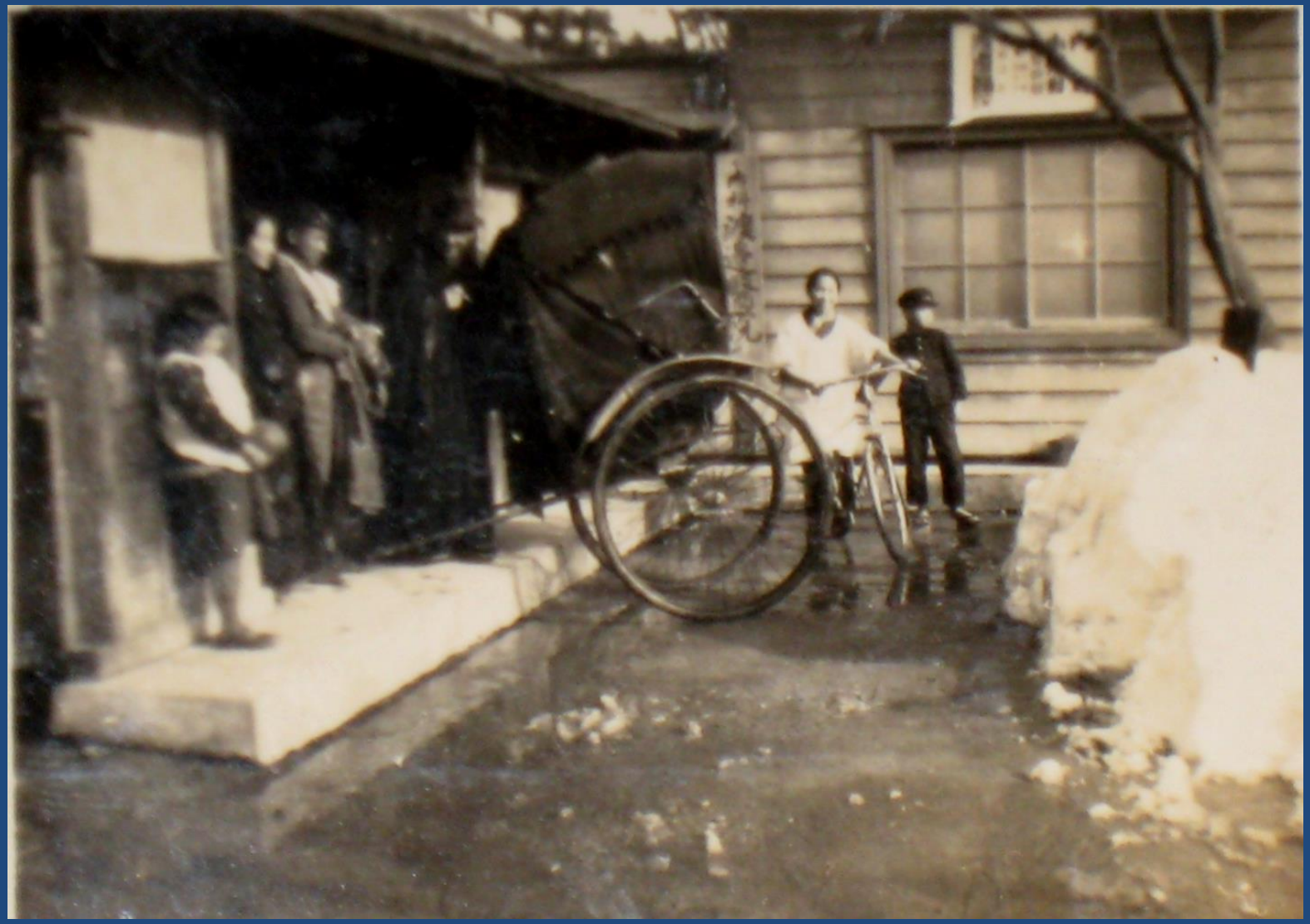
山川邸所在図（江戸時代の古地図）



山川邸跡地（新発田市上館・七葉中北東側）

妻なおの実家渡辺医院所在地

妻なおの実家（新発田市本田・渡辺医院）



妻なおの実家の医院跡（新発田市本田）

北越学館時代の山川丙三郎（前列右から二人目）

東北学院時代の山川丙三郎（後列左から2人目）
押川方義初代院長（前列右から2人目）
「北越の三羽烏」出村悌三郎(後左端）木村清松（前左端）と共に

市井のダンテ研究家：大賀壽吉

1865（慶応元）年 岡山に生まれる。

1880 (明治１３）年 岡山教会で新島襄より受洗。

その後、同志社神学校を出て、神戸で英字新聞の記者などをする。博学多能、文学芸術に通じ、英学は最も得意とする。薬種商武田長兵衛商店（後の武田薬品工業）の渉外顧問。

我が国における草分けのダンテ学者、ダンテ文献を所有する我が国の第一人者。イタリアダンテ学会唯一の日本人、世界のダンテ学者と交流。ダンテに関する論文エッセイを執筆。1937（昭和12）年に逝去。遺族がダンテ関連書約3千冊を「旭光文庫」として京都大学に寄贈。

山川丙三郎の訳業に対して210通の書簡や葉書で情報を提供し、訳文についてコメントし、書籍を与えたり貸したりして、惜しみなくダンテ研究を支援した。

山川丙三郎の感謝の言葉

「‥大賀壽吉氏が本書翻訳の始めより終わりにいたるまで数々の便宜と有益なる助言とを与えられ、かつまた本書のため参考書目を編成せられたことに対して私は心から感謝している。（省略）

大賀壽吉氏の逝去は我国に於けるダンテ研究途上の一大損失であった。ダンテに対する氏の熱愛とその真摯な態度とは誠に稀に見るところであって、或は講壇に立ち、或は文筆を馳せ、書庫を開放し、或はまた後進の学とを集めて講じ、孜々としてその学の興隆に努めた。‥」（文庫版『新生』あとがきより）

木村文雄編「大賀寿吉氏の書簡」『イタリア学会誌』第3号（1954年）第7号（1958年）第8号（1959年）第9号（1961年）第15号（1966年）。

赤井規晃・松田公江・下館和己「復刻 山川丙三郎の大賀寿吉宛の書簡」『東北学院英学史年報』第37号（2016年）以降毎年掲載。

詩を朗読する山川丙三郎

仙台市北山墓地かつての山川丙三郎の墓

（妻なお、娘恵）

仙台北山墓地 現在の山川丙三郎の墓

ダンテ・アリギエーリ

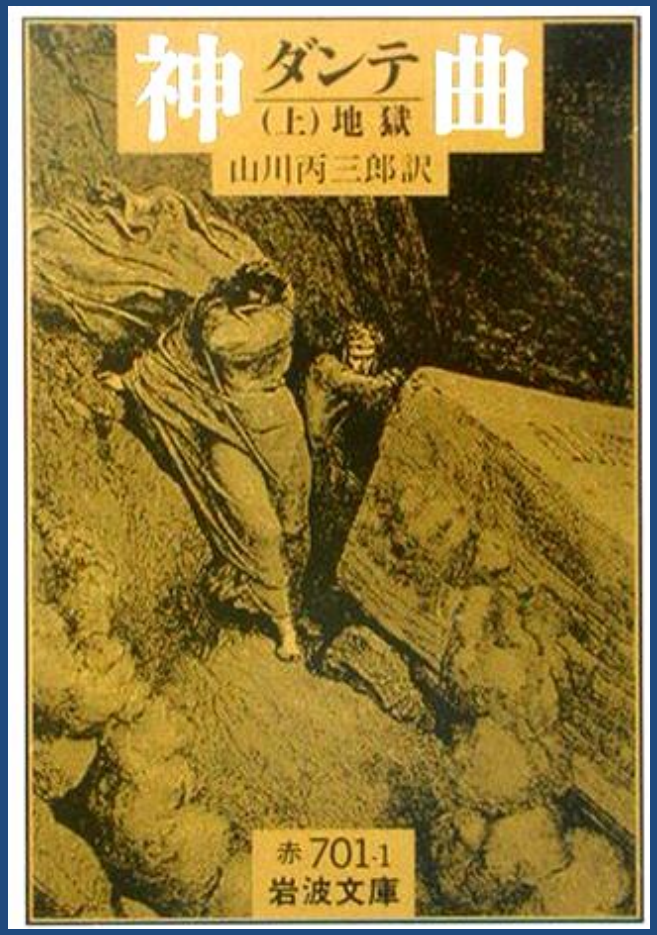
ボッティチェリ画

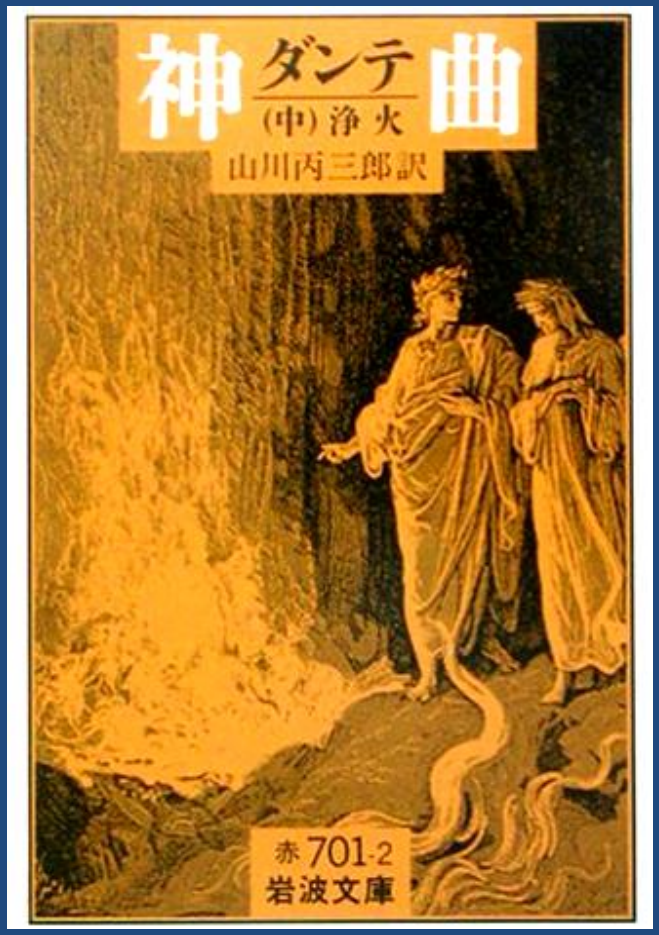
ラファエロ画

2.ダンテ・アリギエーリの生涯

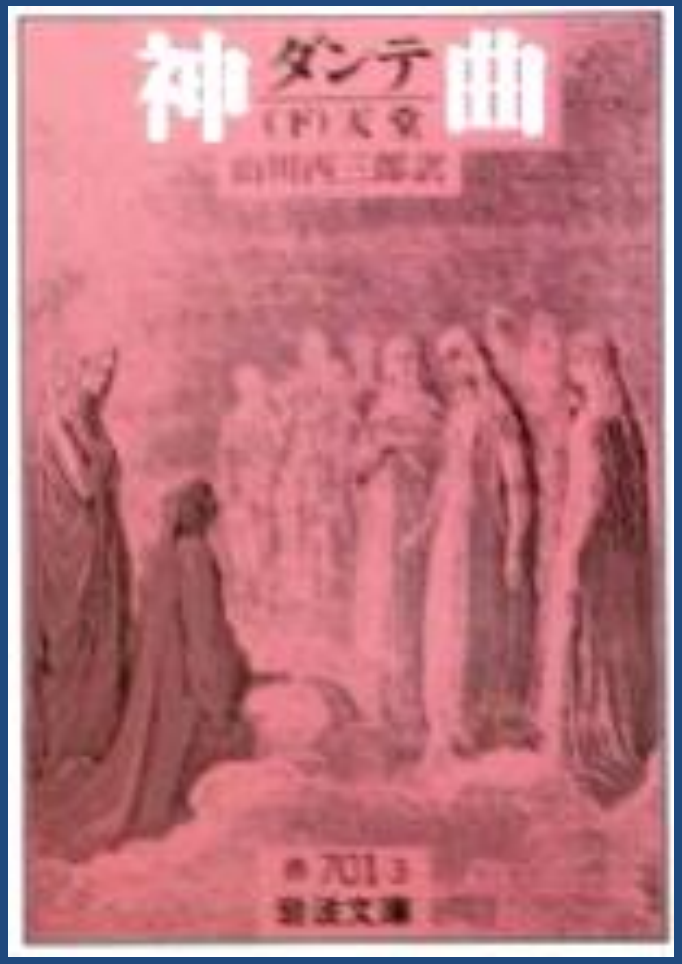
1265年 フィレンツェの小貴族の家に生まれる
1270年 母ドンナ・ベルラ世を去る
1274年「ベアトリーチェ」を初めて見る
1277年 父アリギエーロ世を去る
（修道院付属のラテン語学校で教育を受け、当代一流の学者ラティーニから修辞学を学び、西洋古典のホメロス、ヴェルギリウス、オヴィディウスなどの作品を読む）
1283年「ベアトリーチェ」に再会する この頃から詩を作成し、初めてソネットを作る
（イタリアの代表的詩人カヴァルカンティらを知り、ボローニャ大学で「雄弁論」を聞く）
1290年「ベアトリーチェ」24歳でこの世を去る（ボエティウス『哲学の慰め』
キケロ『友情論』などを読む、各派の修道院で神学や哲学の講義を聞く）
1292年「永遠の女性」への想いを綴った詩31編をまとめた『新生』出版（＝原『神曲』）
1295年 婚約者ジェンマ・ドナーティと結婚、医薬業組合に参加し公職に就く
1300年 フィレンツェの「プリオリ」(6人の政治指導者）に就く
1305年 政治的対立と陰謀により、フィレンツェを永久追放され、放浪生活に入る
1307年 この頃から『神曲』を書き始める ルッカから、招かれてヴェローナに移る
1317年 ラヴェンナに移住し、安住の地とする
1320年 この頃『神曲』を完成する
1321年 ラヴェンナで没する

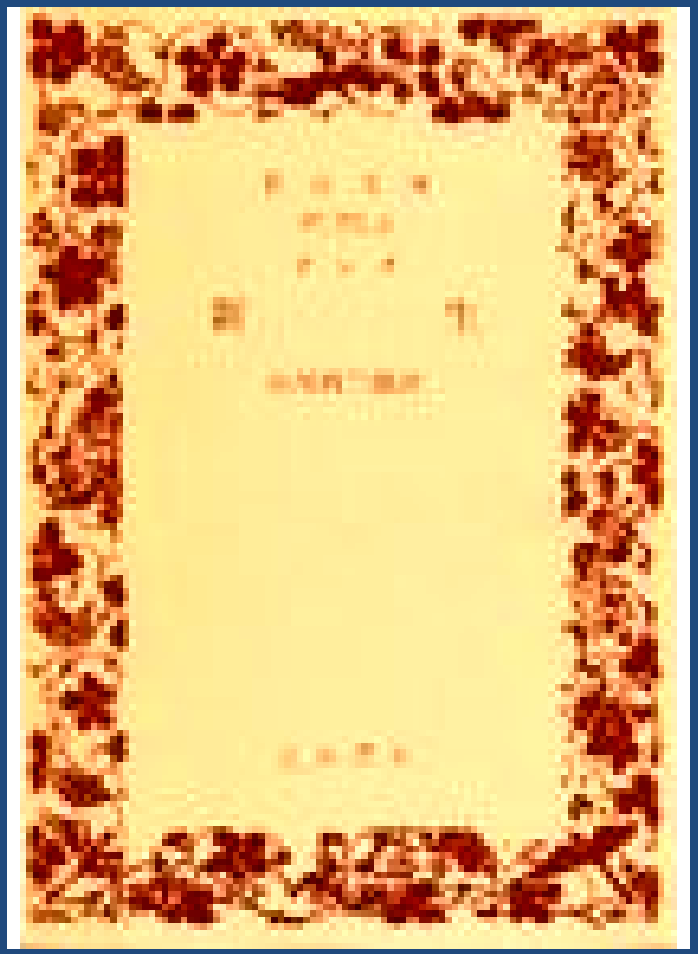
山川訳『神曲』「地獄篇」「浄火篇」（岩波文庫）
ギュスターブ・ドレのエッチングによる表紙





山川訳『神曲』「天堂編」・『新生』（岩波文庫表紙）





山川丙三郎訳『神曲』（冒頭の一部）

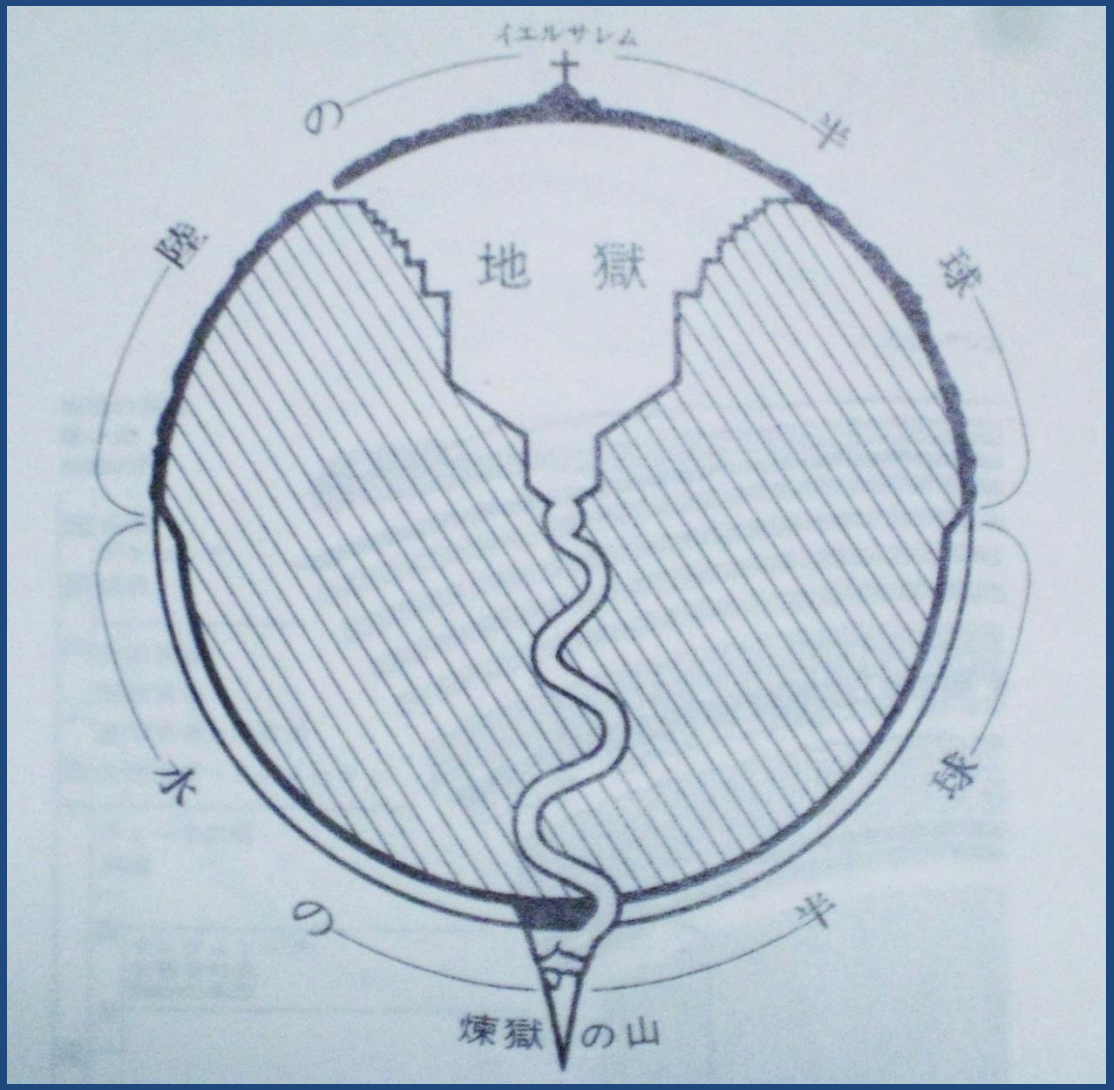
『地獄篇』第1曲

「われ正路を失い、
人生の羈旅半ばにありて
とある林の中にありき」

『地獄篇』第3曲

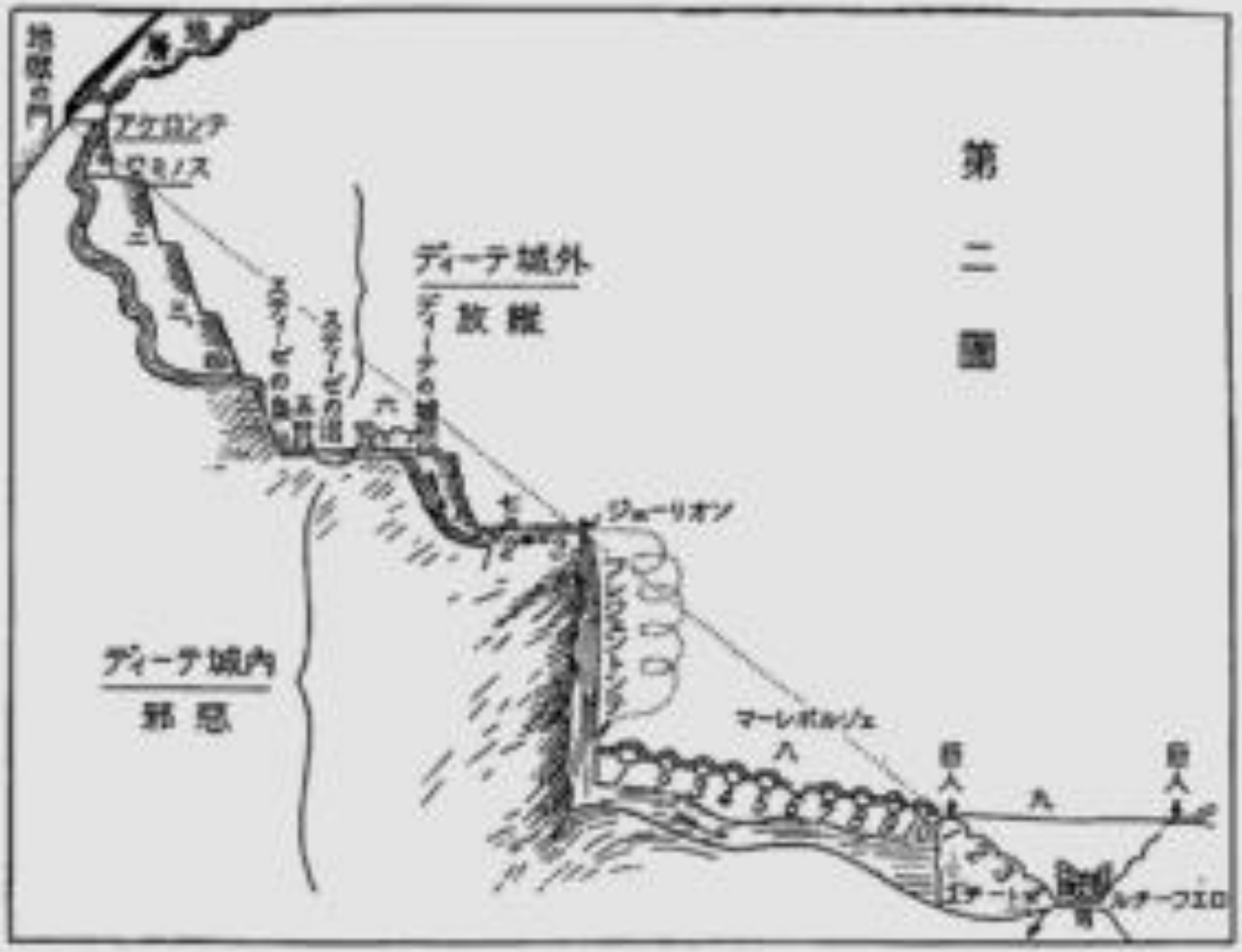
「我を過ぐれば憂ひの都あり
我を過ぐれば永遠の苦患あり
我を過ぐれば滅亡の民あり
汝等ここに入るもの
一切の望みを棄てよ」

『神曲』の全体像

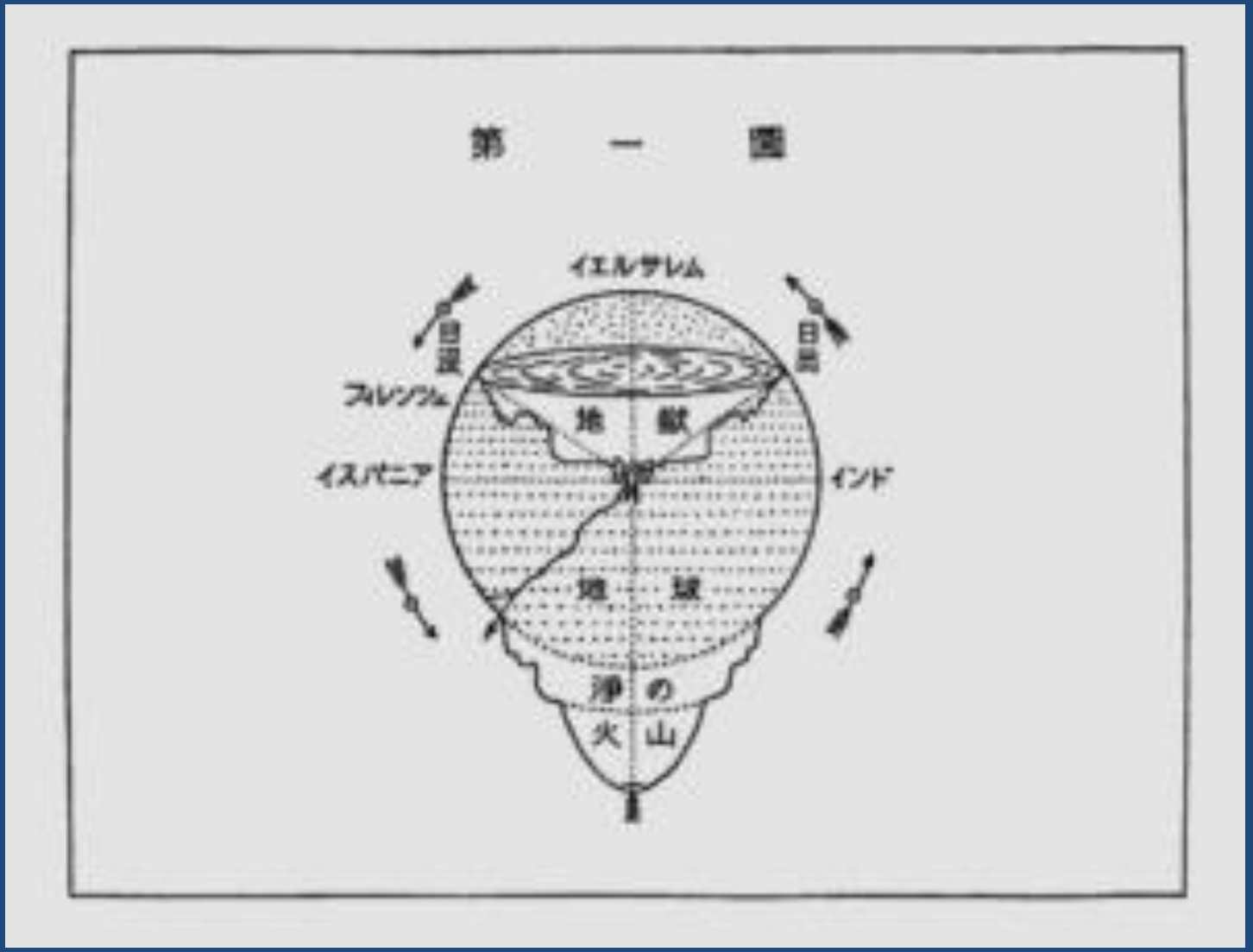


地獄編：地獄の構造（ボッティチェリ画）

地獄の9階層

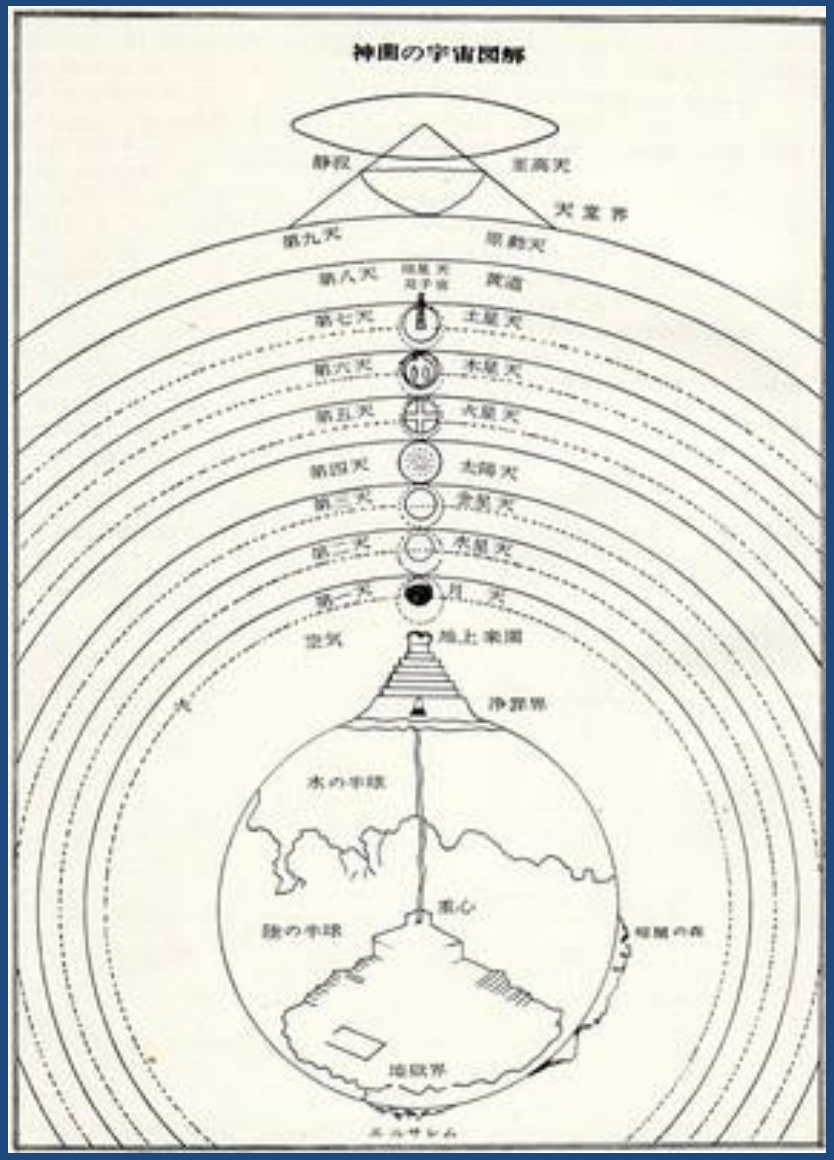


煉獄編：地獄を通り抜けて浄火の山を登る



7階層の浄化（煉獄）の山

天国編：第9天から天堂界（天国）へ



『神曲』各編最後の行

『地獄篇』第33曲139行

「かくてこの處を出でぬ　再び諸々の星を見んとて」

『煉獄篇』第33曲143行

「清くして、諸々の星にいたるに　ふさはしかりき」

『天国篇』第34曲145行

「日やそのほかのすべての　星を動かす愛に」

参考『新生』第1ソネット

「星みな燦かなる時の間の　三つの一ほど過ぎしころ
愛ふと我に現れぬ」

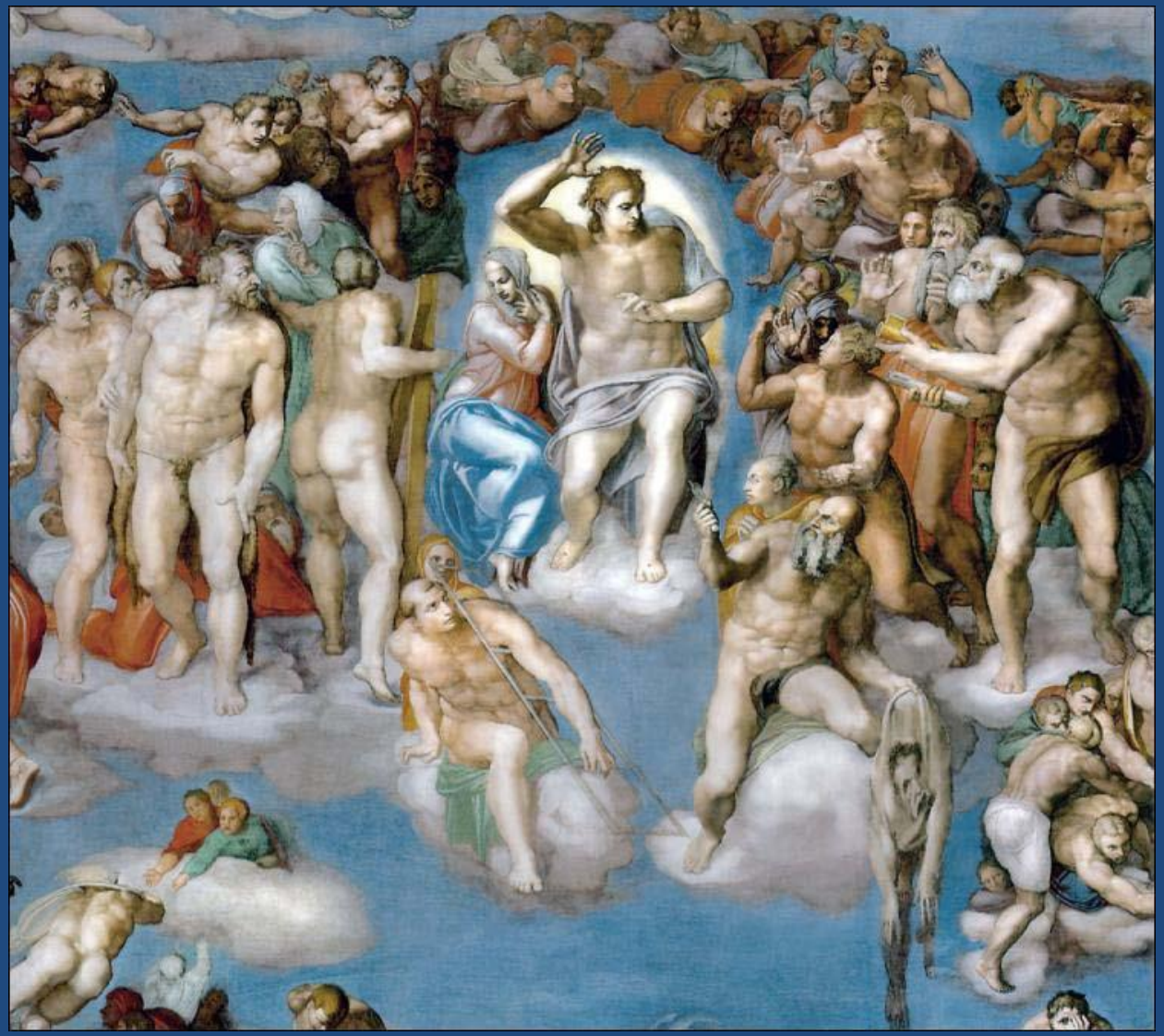
３.『神曲』の影響：（１）ミケランジェロ（1475～1564年）

「最後の審判」システィナ礼拝堂

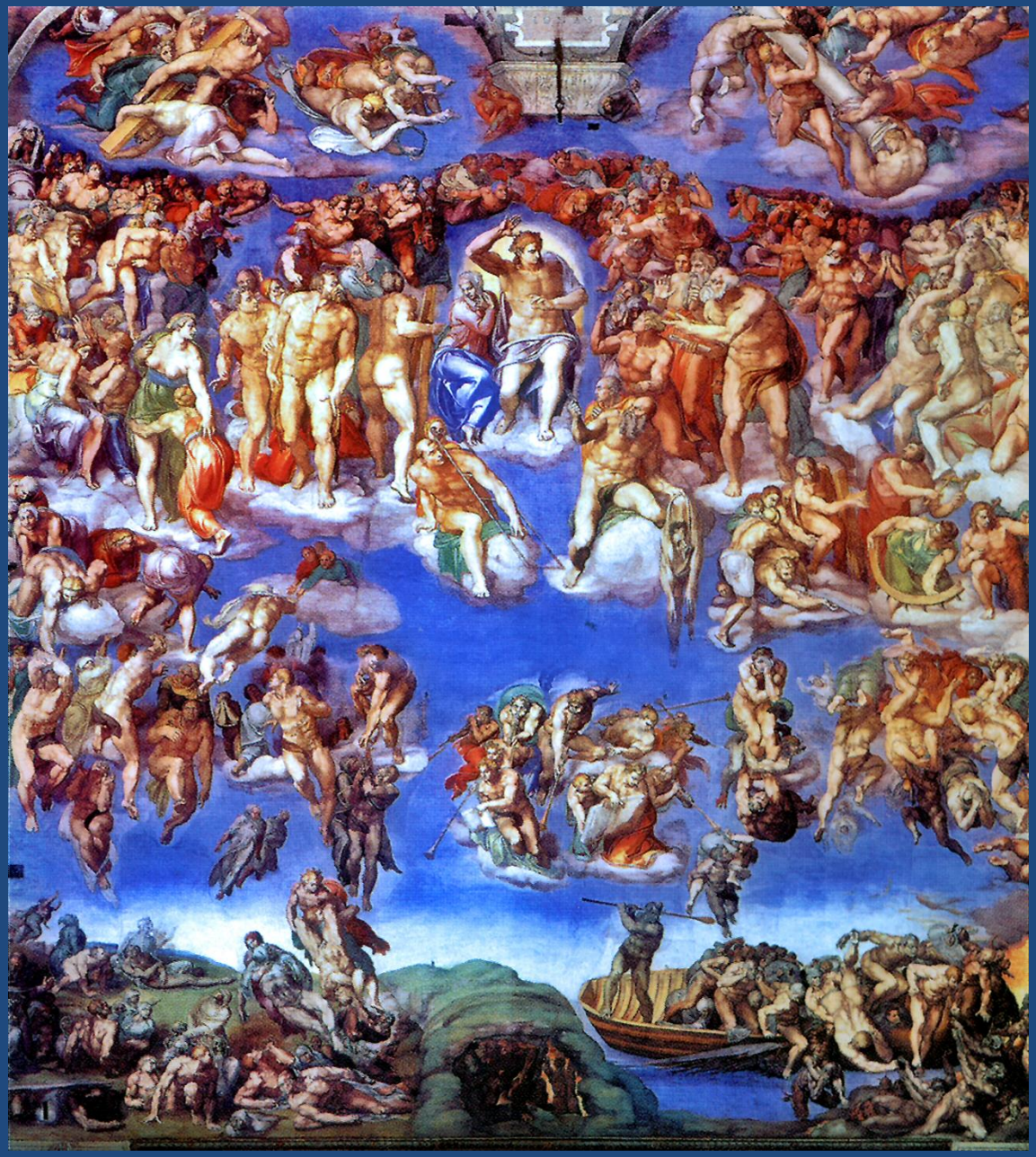
ミケランジェロの「地獄」

ミケランジェロの「煉獄」

ミケランジェロの「天国」



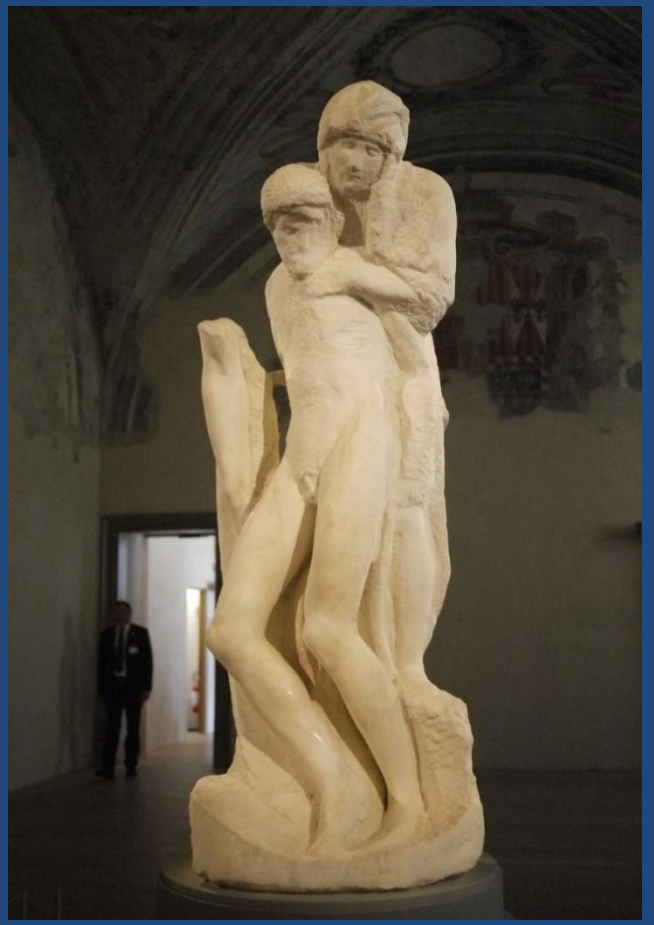
ミケランジェロの「自画像」と「考える人」



地獄に落ちそうな40代の自画像

フィレンツェの「ピエタ」
70代の自画像

ロンダニーニの「ピエタ」
80代の自画像



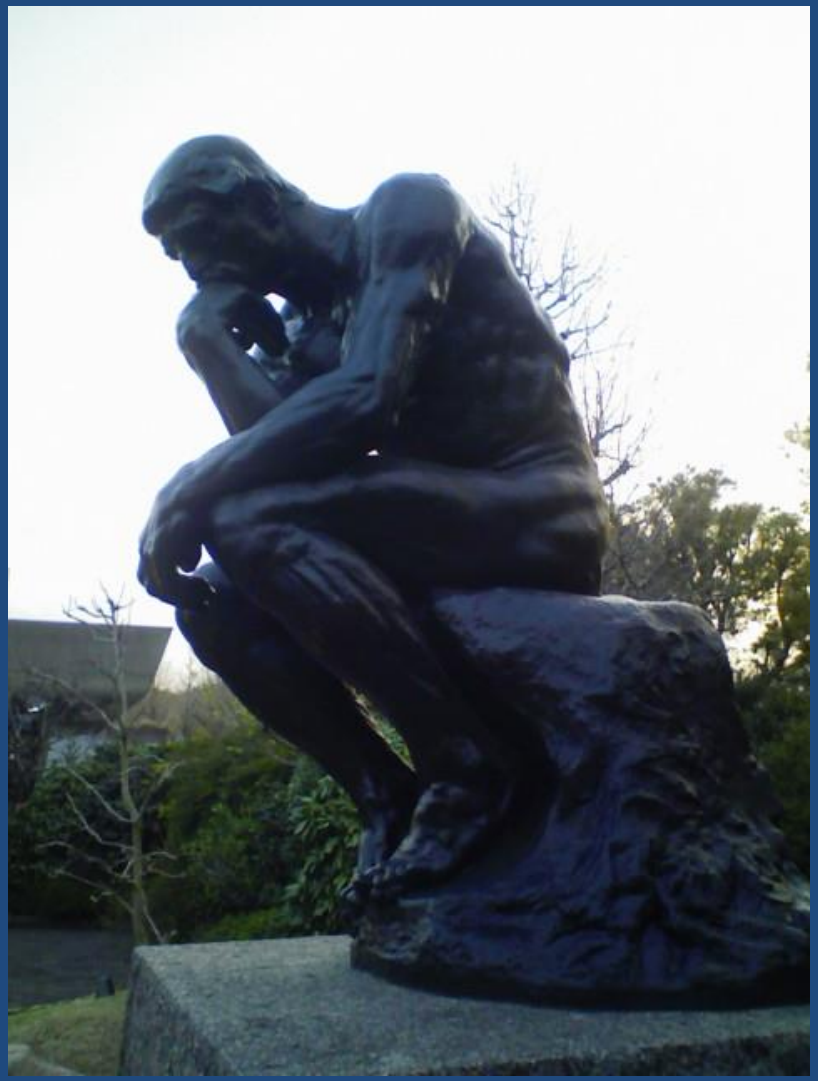
ミケランジェロ『最後の審判』の「考える人」

（2）オーギュスト・ロダン（1840～1917年）

ロダン「地獄門」（上野・西洋美術館前庭）

『地獄門』上部の「考える人」

ロダン「考える人」(上野西洋美術館前庭）



結びに：山川丙三郎最愛の聖書の言葉

「私は裸で母の胎を出た。
裸でそこに帰ろう。
主は与え、主は奪う。
主の御名はほめたたえられよ。」
（ヨブ記1:21）